

# ALTによる英語教育に対する学習者の取り組みと評価・認識

—— 鳥取県東部の中学・高校生を対象とした調査より ——

英語科教育研究室 足 立 和 美  
教育心理学研究室 戸 田 有 一

## A Study on Attitudes of Japanese Learners of English toward ALT's

— Analysis of Data Obtained from 3799 High School Students in Eastern Tottori Area —

Kazumi ADACHI, Yuichi TODA

### I. 目 的

1987年に文部省を中心として、Japan Exchange Programme (JET) が開始され、全国の中学校、高等学校の英語教育の現場に Assistant Language Teacher (ALT) が配属されるようになった。このJETプログラムは年々拡張していき、1995年度には全国で4,230人のALTが英語の授業を担当している。ここ鳥取県には、現在約60名のALTが配置されている。

わが国の英語教育に英語母国語話者が参加することにより、これまで教科書（書記言語）が主体であった英語の教授・学習に新しい側面が付け加えられることになった。同時に、日本人英語教師とALTが共同で行う授業 (Team-Teaching) のための教材不足、有効な教授法の未確立、現行の教科書との関連性の不足など、これまでには無かった問題が新たに浮上してきている。また、教室で実際に授業を受ける生徒たちが、ALTの参加をどのように評価、認識しているのか、いまだ不明の点が多い。加えて、わが国の外国語教育に対するALTからの指摘にも、傾聴に値するものが少なくない。

本論では、JETプログラムが招来した以上のような問題領域の中から、学習者に関係する問題を取り上げて検討している。特に、ALTの授業参加が、青年期にある学習者の授業態度（集中度、積極性、理解度など）や情意領域（動機付け、興味、関心、親近感など）にどのような影響、効果を与えているのかを調査することにより、今後の中学校・高等学校でのJETプログラムの更に効果的な利用法を考える際の基礎的なデータを提供することを主なねらいとしている。

## II. 方 法

調査時期：1995年の1月から2月。

調査対象：鳥取県東部地区の中学校11校，高等学校6校の生徒，3,799名。質問紙を配布した中学校は12校，高等学校は6校であった。学校によって，調査した学年は異なっており，各学校ですべての学年を調査したわけではない。

中学1年生は806人(21.3%)，中学校2年生は869人(22.9%)，中学校3年生は556人(14.7%)，高校1年生は1,026人(27.1%)，高校2年生は301人(7.9%)，高校3年生は233人(6.1%)，不明は8人であった。

性別では，男子生徒1,987名(52.4%)，女子生徒1,805名(47.6%)，不明7名。

調査対象における学年別・性別の人数は，表2-1のようになった。

表2-1 調査対象の学年別・性別人数

(無効標本数11) (単位：人(%))

	男子生徒	女子生徒	合 計
中 1	411(51.0)	395(49.0)	806
中 2	453(52.2)	415(47.8)	868
中 3	262(47.2)	293(52.8)	555
高 1	555(54.1)	471(45.9)	1,026
高 2	186(62.0)	114(38.0)	300
高 3	118(50.6)	115(49.4)	233
合 計	1,985(52.4)	1,803(47.6)	3,788

学年によって男女比が異なり，学年差のみの分析や性差のみの分析はできない。

調査方法：ALTに関する25項目からなる調査書を作成し，予め了解が得られていた学校に送付した。調査書は，1項から5項までが被調査者のプロフィールなどに関するもの(学年・性別・英語に関する質問)で，6項から25項までがALTに直接関係のある質問内容となっている。学習者は各学校で担任の教師等の指示により，下記の五つの選択肢から選んで回答した。

### <ALTに直接関係のある質問>

6. ALTが授業に参加すると，いつもより英語の勉強をやる気になる。
7. ALTが授業をうけて，英語に自信ができた。
8. ALTの授業がもっとふえたらよいと思う。
9. ALTの授業をうけて，今まで以上に外国について知りたくなった。
10. ALTの授業では，なるべく英語を話すようにしている。
11. ALTの授業では，本物の英語に接することができるから好きである。
12. ALTの授業は，ふだんの授業より楽である。
13. ALTの授業を受けて今まで以上に英語が勉強したくなった。
14. ALTが話すときは，なるべく気持ちを集中して聞くようにしている。

15. A L T の授業を受けて、教科書に出ている以外の英語の表現をおぼえた。
16. A L T の授業は、テストのとき役に立つ。
17. A L T が少しでも日本語を使うと、勉強がわかりやすくなる。
18. A L T が参加する授業の前は、質問してみたいことをメモなどして準備している。
19. A L T が参加した授業の後では、授業でならったことをよく復習している。
20. A L T が日本語について質問すれば、教えてあげたい。
21. A L T の授業をうけて、教科書がよくわかるようになった。
22. A L T の授業では、普段の教科書は使わない方がよいと思う。
23. A L T が参加する授業では、ふだんの授業よりきんちょうする。
24. A L T が英語で言っていることは、だいたい理解できる。
25. A L T といっしょにスポーツなどもしてみたい。

<回答の際の選択肢>

1. 強く同意する
2. 同意する
3. どちらでもない
4. 同意しない
5. まったく同意しない

(なお、今回の調査研究で使用された実際の調査書は *Perceptions of the JET Programme* (Adachi, Macarthur, Sheen, 1996) に収録されている)

### III. 結果と考察

#### 1) 英語に関して

英語に関する質問は、下記の2つであり、それぞれについて分析を行った。また、この2つの項目の間の相関係数は、0.37であった。

##### a) 英語は、あなたにとってとくいな科目ですか

各選択肢への回答を表3-1-1に示した。また、性別・学年別の平均値は図3-1-1a、に示した。

学年と性別の交互作用は見られなかったが、若干の学年差が見られるとともに、「とくいではない」という方向の回答の率は一貫して男子の方が女子よりも高かった。

英語は6年間を通じて、特に男子にとっては、なかなか「得意だ」とは言い難い科目のようである。学年差を見た場合に、中3と高3において特に「得意」ではない方に傾いているのは、受験科目としての英語が意識されるためかもしれない。

表3-1-1 英語に関する項目への回答

単位：人(%)

	1. 強く同意する	2. 同意する	3. どちらでもない	4. 同意しない	5. まったく同意しない
英語得意?	241(6.4)	695(18.4)	758(20.1)	954(25.3)	1,122(29.8)
英語役立つ?	1,065(28.2)	989(26.2)	894(23.7)	523(13.9)	302(8.0)

b) 英語は、あなたの将来にとって役に立つと思いますか

各選択肢への回答を表3-1-1に示した。また、性別・学年別の平均値は図3-1-1 bに示した。

中学生から高1までは、男女ともに似た回答傾向にあるが、高2と高3では性差が顕著になる。この高2からの性差は、何によるのであろうか。高2の頃からの違いということと考えられるのは、大学受験を意識することやそれに伴う文系・理系への振り分けである。大学受験を意識した英語に限定して取り組めば取り組むほど、それが将来「役に立つ」かどうか疑問に思われる可能性もある。また、文系・理系志望における男女の偏り（文系志望に女子が多く、理系志望に男子が多い）が、英語学習時間数の偏り、得意-不得意意識、入学試験での得点の予測などに基づいて、自分の学んでいる英語が入試においても現実の場面においても「役に立つ」かどうか疑うようになるのかもしれない。

〈英語は、あなたにとってとくいな科目ですか〉

〈英語は、あなたの将来にとって役に立つと思いますか〉

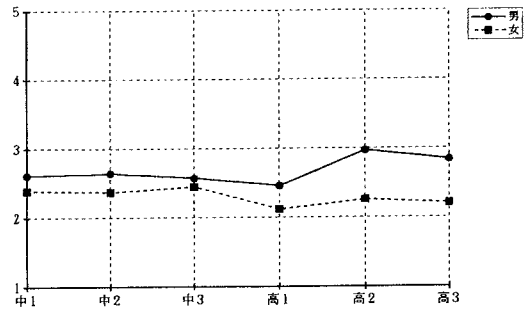
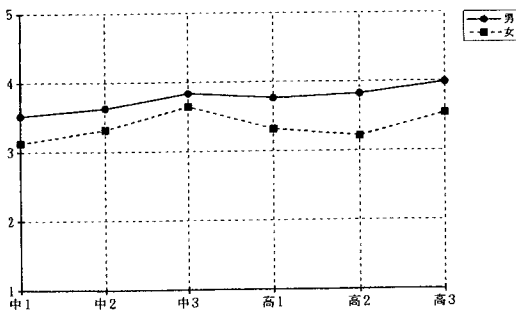


図3-3-1 a 問4への回答の性別・学年別平均値

図3-3-1 b 問5への回答の性別・学年別平均値

注：縦軸の1は「強く同意する」、2は「同意する」、3は「どちらでもない」、4は「同意しない」、5は「まったく同意しない」を示す。以下の図についても同様。

2) ALTに関して(単純集計)

個々の項目の各選択肢への回答数と率を、表3-2-1に示した。

問18は特に一つの選択肢に回答が集中していた。また、問22、問23、問25は、それぞれの選択肢への回答にピークが2つあった。それ以外は、比較的偏りもなく、ピークも一つと考えてよさそうであった。また、問18と問19以外は、回答の平均値が2の「同意する」から4の「同意しない」の間にあった。

平均値が高い（「同意しない」側の）5項目は従来の形での学習と関わっており、これらの項目に「同意しない」傾向は、むしろ、ALTによる英語教育が従来の学習形態の延長線上にあるものではないものとして受け入れられていることの証左ではないだろうか。

表3-2-1 ALTに関する項目への回答

単位：人(%)

	平均値	1.強く同意する	2.同意する	3.どちらでもない	4.同意しない	5.まったく同意しない
問17 わかりやすい	2.22	1,205(32.0)	1,262(33.5)	812(21.5)	265(7.0)	226(6.0)
問12 楽	2.29	1,168(31.0)	1,155(30.6)	880(23.3)	342(9.1)	227(6.0)
問14 集中	2.53	726(19.2)	1,290(34.1)	1,070(28.3)	434(11.5)	258(6.8)
問22 テキスト不使用	2.55	1062(28.2)	605(16.1)	1,413(37.5)	329(8.7)	358(9.5)
問20 日本語質問	2.58	837(22.2)	936(24.9)	1,276(33.9)	404(10.7)	312(8.3)
問6 やる気	2.65	606(16.0)	1,082(28.6)	1,389(36.7)	462(12.2)	250(6.6)
問8 授業回数	2.69	844(22.3)	807(21.3)	1,254(33.2)	444(11.7)	432(11.4)
問11 本物好き	2.80	592(15.7)	923(24.5)	1,306(34.6)	561(14.9)	389(10.3)
問25 課外活動	2.87	783(20.7)	644(17.1)	1,275(33.8)	427(11.3)	646(17.1)
問15 英語表現	2.98	552(14.6)	926(24.5)	986(26.1)	665(17.6)	645(17.1)
問23 緊張	3.03	583(15.5)	816(21.7)	1,060(28.2)	488(13.0)	807(21.5)
問9 外国興味	3.09	390(10.3)	732(19.4)	1,383(36.6)	685(18.2)	584(15.5)
問10 積極的	3.29	250(6.6)	703(18.7)	1,210(32.1)	931(24.7)	675(17.9)
問24 理解	3.30	271(7.2)	807(21.4)	954(25.3)	982(26.1)	751(19.9)
問13 意欲	3.36	153(4.1)	445(11.8)	1,726(45.8)	771(20.5)	675(17.9)
問7 自信	3.45	96(2.5)	361(9.6)	1,709(45.2)	987(26.1)	625(16.5)
問16 テスト	3.50	120(3.2)	420(11.1)	1,467(38.9)	988(26.2)	779(20.6)
問21 教科書	3.52	87(2.3)	308(8.2)	1,694(45.0)	919(24.4)	758(20.1)
問19 復習	4.18	41(1.1)	148(3.9)	698(18.5)	1,106(29.3)	1,782(47.2)
問18 メモ	4.64	26(0.7)	62(1.6)	298(7.9)	458(12.2)	2,924(77.6)

注：項目は回答の平均値が「同意する」側に近い順に並べ替えた。

## 3) ALTに関して(分散分析)

ALTに関する項目についての更なる分析として、性別と学年を要因とした二元配置分散分析を行い、その結果に基づいて項目をグルーピングした。因子分析の直交解では、全体の相関が高いこれらの項目の分類は困難であろうと考えられ、また斜交解でも、解釈が難しいのではないかと思われたためである。また、一つの選択肢に8割近くの回答が集まった問18に関しては、分散分析を行うことが不適當であると判断し、分析対象から除外した。

分散分析の結果により、項目を表3-3-1のように分類し、そのグループごとに結果の記述と考察を行う。また、必要に応じてそのグループの中を更に細分化して、考察を進めることにする。

表3-3-1 分散分析の結果による項目の分類

グループ	学年の主効果	性別の主効果	交互作用	該当した項目の番号
A	—	—	—	問17
B	—	有意	—	問11
C	有意	—	—	問7, 22
D	有意	有意	—	問19, 23, 21, 10, 14, 15, 16, 20
E	—	—	有意	(今回は無し)
F	—	有意	有意	問9, 13, 24
G	有意	—	有意	問6, 8, 12
H	有意	有意	有意	問25

## A) 有意差なしの項目

性別と学年の各々の主効果も交互作用も有意ではない項目は、問17のみであった（図3-3-1）。

問17〈ALTが少しでも日本語を使うと、勉強がわかりやすくなる〉について、全体的に回答の平均値が低いのは、中学生や高校生の英語力ではALTの英語だけによる授業が負担になること、英語を日本語訳や日本語の教示を通じて学習する方法に慣れてきていること、などによると考えられる。またこのことは、自分の母国語ではない言語でコミュニケーションをはかなければならない状況から生じるdebilitative anxietyが、ALTの日本語使用で和らげられるためでもあろう。

〈ALTが少しでも日本語を使うと、勉強がわかりやすくなる〉

〈ALTの授業では、本物の英語に接することができるから好きである〉

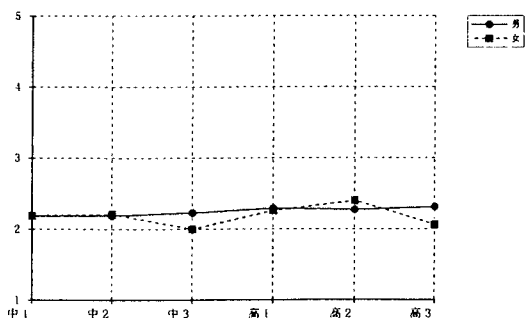


図3-3-1 問17への回答の性別・学年別平均値

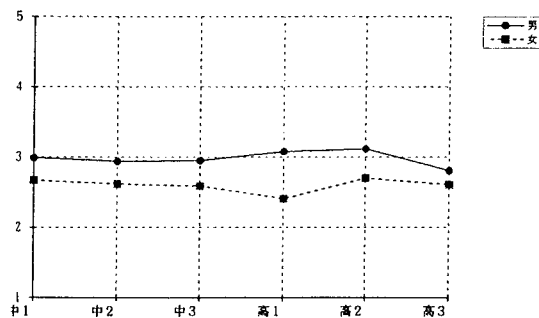


図3-3-2 問11への回答の性別・学年別平均値

## B) 性別の主効果のみが有意な項目

性別の主効果だけが有意な項目は、問11のみであった（図3-3-2）。

問11〈ALTの授業では、本物の英語に接することができるから好きである〉について、女子では各学年とも男子より肯定する回答が多いが、これは女子の方がリスニング活動を含めた音声言語に興味が高いことを反映しているのかもしれない。さらに、有意な差ではないが、他の学年の回答に比べ、高1では肯定的な回答に傾いている。これも、女子の場合は、高等学校という「新しい」環境で英語学習を再開することで、ALTの発話を理解するというリスニング活動にも新たな興味を覚えていることを示すのかもしれない。何が「新しい」のかは、今後更に検討される必要があり、高校女子のこの反応は今後の一つの研究課題である。

## C) 学年の主効果のみが有意な項目

学年の主効果のみが有意な項目は、問7と問22であった（図3-3-3 aとb）。

問7〈ALTの授業をうけて、英語に自信ができた〉については、低学年の方が「同意する」方に傾き、問22〈ALTの授業では、普通の教科書は使わない方がよいと思う〉については、高学年の方が「同意する」方に傾いている。

問7の結果からすると、中学生より高等生の方が、ALTの英語の授業に参加しても自信にさほど結びついていないようである。これは授業内容が高度化すればするほど、ALTが生徒の自信につながるような役目を果たしづらくなっていることを示しているのかもしれない。特

に高等学校では、英語授業全体に占めるALTの授業が少なく（通常、週1回）、日本語を介した授業方法・内容と英語だけを使った授業とが結び付かないからであると考えられる。また、日本語を介させない音声中心の授業は学習者にその内容が定着しにくいことが多く、限られた接触時間だけでは生徒に自信を付けさせる程の効果が与えられないのであろう。

問22については、受験のための学習としての位置づけなどにおいて、ALTの授業と教科書との乖離がだんだんと大きくなることを、生徒たちが感じているのであろう。このことを教師の観点から言い直すと、リーディング・訳・和文英訳などの書記言語中心の活動と、リスニング・スピーキングなどの音声言語中心の活動とを、現行では特に学年の高い方において、統合するのに困難をきたしているということも意味しているのではないだろうか。このことは同時に、今後の英語教育の改善点の所在を示しているといえよう。

〈ALTの授業をうけて、英語に自信ができた〉

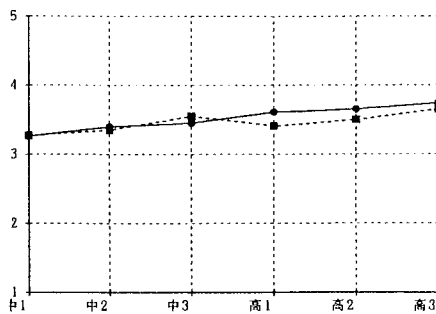


図3-3-3 a  
問7への回答の性別・学年別平均値

〈ALTの授業では、普通の教科書は使わない方がよいと思う〉

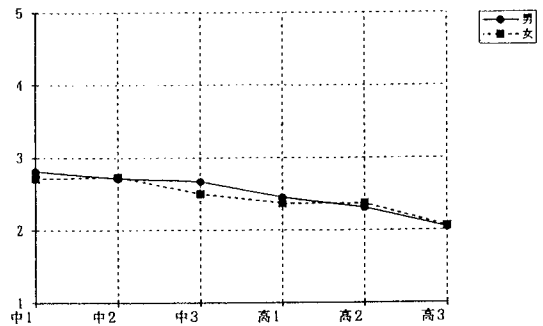


図3-3-3 b  
問22への回答の性別・学年別平均値

#### D) 性別と学年の主効果が有意な項目

〈ALTが参加した授業の後では、授業でなかったことをよく復習している〉

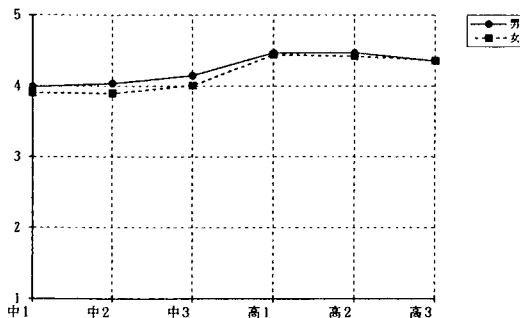


図3-3-4 a  
問19への回答の性別・学年別平均値

〈ALTが参加する授業では、ふだんの授業よりきんちょうする〉

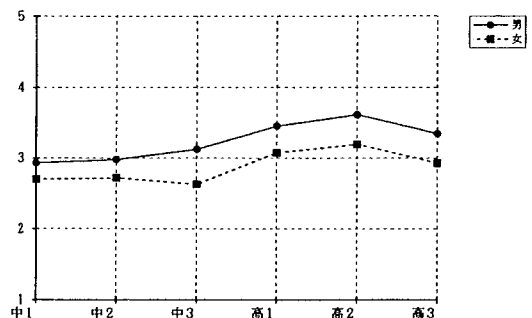


図3-3-4 b  
問23への回答の性別・学年別平均値

〈ALTの授業をうけて、教科書がよくわかるようになった〉

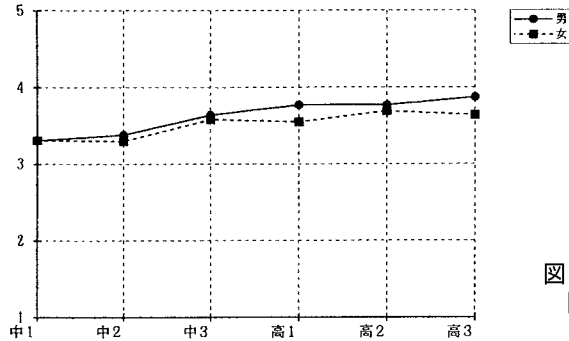


図3-3-4c  
問21への回答の性別・学年別平均値

交互作用はないのだが、性別と学年の両者の主効果が有意である項目は多数あった。そこで、更にいくつかのグループに分けて考えていきたい。性差に関しては女子生徒が常に「同意する」側になっているので、学年差のパターンによって分類する。

まず、低学年において、より「同意する」という回答が多かったのは、問19、問23、問21である（図3-3-4 a, b, c）。

問19〈ALTが参加した授業の後では、授業でなかったことをよく復習している〉については、回答の平均値は全体的に4か4以上の範囲で、「よく復習している」人は少ない。この否定的な傾向は、多重比較の結果、中1～中3と比べ高1～高3で有意に高くなっている。ALTの授業は、中学校・高等学校のいずれにおいても、教科書の内容から離れがちであったり、あるいは教科書の内容を補うことに主眼が置かれる傾向が強い。このために、生徒の復習内容は教科書や教科書に準拠した問題集などが中心となり、ALTの授業まで復習することは少ないと思われる。さらに、高等学校でこの傾向が強くなるのは、一層高度になる高校英語では教科書そのものの理解に苦勞する学習者が増えることなどによるのであろう。高校では、中学校時よりもALTと教科書との関連性が低くなりがちなこと、この傾向に影響しているかもしれない。

問23〈ALTが参加する授業では、ふだんの授業よりきんちょうする〉については、中1～中3と高1・高2の間に多重比較における有意差が見られている。緊張しないのだが、ALTに親しめてリラックスできている結果であればよいのだが、後に示す問14の結果にあるように、高校ではALTの授業に気持ちを集中して聞く割合が減ってきていることからすると、緊張するような気持ちで授業に臨んでいないことの結果であると考えられる。女子において、緊張する度合いが男子より高くなっているのは、英語の授業で観察される *facilitative anxiety* と関係していると考えられる。

問21〈ALTの授業をうけて、教科書がよくわかるようになった〉については、中1・中2と中3～高3との間に、多重比較における有意差が見られる。これは、ALTの授業の教科書理解への有効度は教科書が難しくなると相当低減するからとも言えるであろうし、またALTの授業内容と教科書の内容の関連性が、高学年においてはかなり乏しくなっているからであるとも言えよう。

次に、高2が他の学年と比べて「あてはまらない」という回答に傾いているのが、問10と問14である（図3-3-4 d, e）。



〈ALTの授業では、なるべく英語を話すようにしている〉

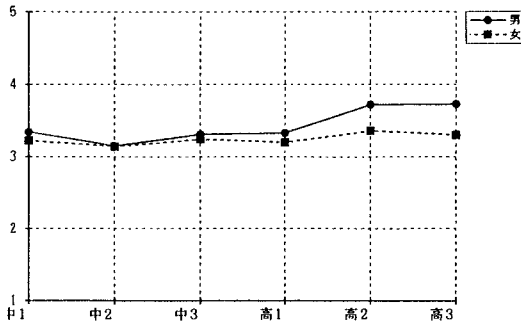


図3-3-4 d  
問10への回答の性別・学年別平均値

〈ALTが話すときは、なるべく気持ちを集中して聞くようにしている〉

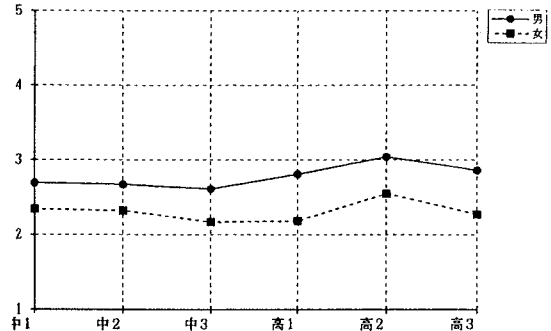


図3-3-4 e  
問14への回答の性別・学年別平均値

問10〈ALTの授業では、なるべく英語を話すようにしている〉も、問14〈ALTが話すときは、なるべく気持ちを集中して聞くようにしている〉も、中1～高1に比べて、高2で「あてはまらない」方向に傾いている。

問10については、英語の音声面の学習の内でも特に発話行為は、ALTやクラスメートに聞かれるがゆえに他者を意識せざるを得ない行為であることに由来していると考えられる。エラーを多く含むことが予見され、文生成もスムーズにはいかないとされる学習活動は、男子には特に苦手と映っているようである。

問14については、中間学年での中だるみと同時に、英語に対する興味の減少、関心を持つ分野の拡散などの要因のために、ALTの発話にも注意を払わなくなるためと考えられる。ただし、男子生徒同様に高2での中だるみがあるのだが、女子生徒はどの学年でもALTの授業に対する集中度が比較的高い。英語は一般的に教師に対する依存度が他教科より高い教科であると言われているが、この結果はそのことともなんらかの関連があるのだろうか。また、男子より女子の方が語学に対する適応性を備えているという観察も、実は女子と男子との授業での集中度の違いによる可能性がある。

ただし、この2項目に関しては、「話すようにしている」「聞くようにしている」という表現上の類似がある。そのような自己の態度の認知や、無記名の質問紙上とはいえ、その認知の社会的文脈での表出に対する抵抗感（積極的な態度で学習しようとしているということ自体を、恥ずかしいことと考える、など）などが、回答の学年差となって現れているのかもしれない。

3番目に、中高それぞれにおいて、1年生と3年生との間に学年差が見られたのが、問15と問16であった(図3-3-4 f, g)。問15〈ALTの授業を受けて、教科書に出ている以外の英語の表現をおぼえた〉は、中1・中2と中3・高2との間に有意差があり、問16〈ALTの授業は、テストのとき役に立つ〉は、中1・中2・高1と中3・高2・高3との間に有意差があった。

〈ALTの授業を受けて、教科書に出て  
いる以外の英語の表現をおぼえた〉

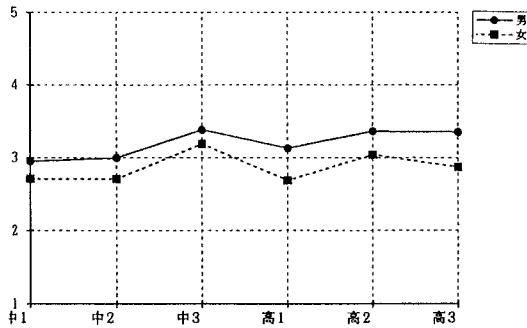


図3-3-4 f  
問15への回答の性別・学年別平均値

〈ALTの授業は、テストのとき役に  
立つ〉

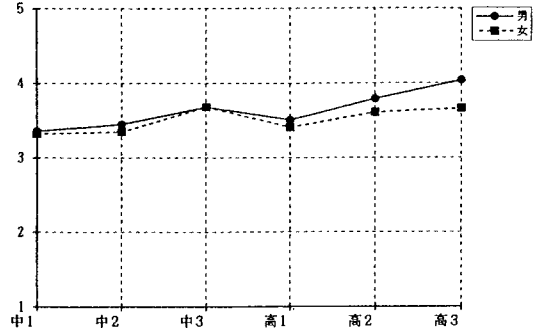


図3-3-4 g  
問16への回答の性別・学年別平均値

問15については、男女ともに中3で否定的な回答が増加するのは、高校入試との関係のためであると考えられる。英語の場合、高校入試は中学校の教科書の範囲内の語彙や文法を使って作成することが原則であるため、生徒はこの時期、教科書を中心に学習すると考えられる。また中学校ではこの学年については、ALTの授業も比較的教科書の内容に準拠した活動になりがちである。このため、教科書外の語彙、文法などはあまりALTがとりあげていない可能性が高い。また、男女とも高1でやや肯定的な意見が増加するのは、高校入試を終えたこの時期、教科書で扱ってはいないが興味を引く英語表現に注意を払う余裕が生まれるためでもあろう。

問16についても、高校入試や大学入試を意識するための結果であると考えられる。男女とも低学年では否定的回答の割合が低いのは、この時期にはある程度ALTの授業内容をテストに利用しているからであると考えられる。しかし、入学試験が近づくと、学校でのテストが入試の準備として内容的、形式的に変化し、ALTが担当しているリスニングやスピーキングなどが徐々にテストから減少していくため、上記のような結果となると思われる。また、女子の否定的回答が男子より少ないのは、男女の志望校・志望学部の入試内容の差などが原因であると考えられる。

最後に、問20〈ALTが日本語について質問すれば、教えてあげたい〉は、先ほどの問15・問16とは逆で、中3や高3の方が「同意する」方向に傾いていると思われるものである(図3-3-4 h)。この項目での積極性は、それぞれの学校生活やALTへの「馴れ」と関連しているのかもしれない。

〈ALTが日本語について質問すれば、  
教えてあげたい〉

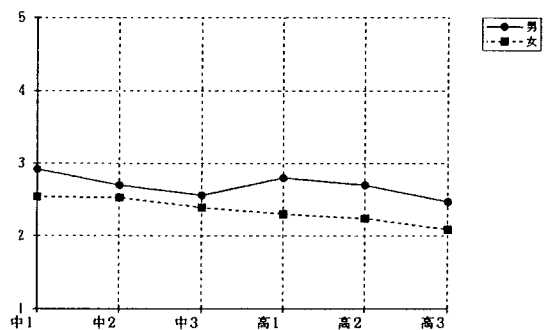


図3-3-4 h  
問20への回答の性別・学年別平均値

## E) 交互作用のみの項目

今回の項目の中には、交互作用のみが有意である項目は無かった。

## F) 交互作用と性別の主効果のみが有意な項目

交互作用と性別の主効果のみが有意な項目は、問9と問13と問24であった(図3-3-5 a, b, c)。

〈ALTの授業を受けて、今まで以上に外国について知りたくなった〉

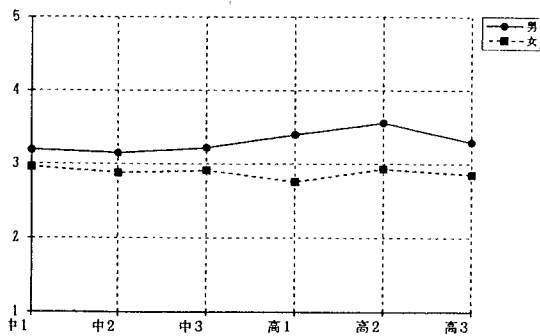


図3-3-5 a  
問9への回答の性別・学年別平均値

〈ALTの授業を受けて今まで以上に英語が勉強したくなった〉

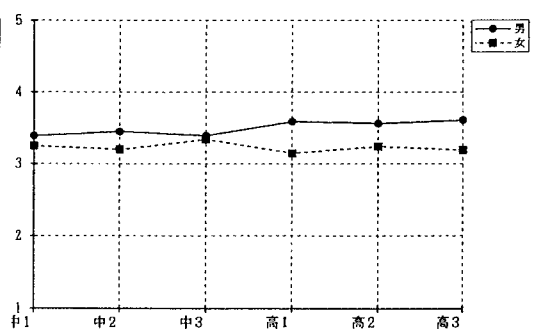


図3-3-5 b  
問13への回答の性別・学年別平均値

〈ALTが英語で言っていることは、だいたい理解できる〉

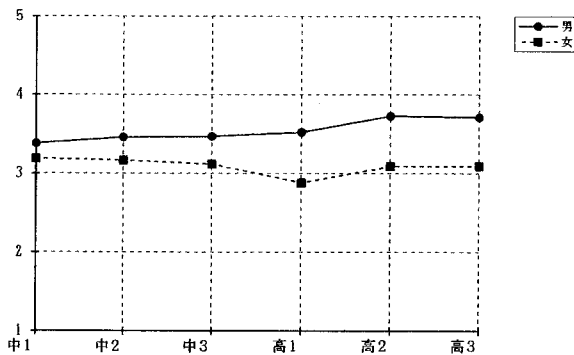


図3-3-5 c  
問24への回答の性別・学年別平均値

問9〈ALTの授業を受けて、今まで以上に外国について知りたくなった〉も、問13〈ALTの授業を受けて今まで以上に英語が勉強したくなった〉も、問24〈ALTが英語で言っていることは、だいたい理解できる〉も、中1～中3ではほとんど性差がないが、高1～高3では性差があり、女子生徒に比べて男子生徒が「あてはまらない」方に傾いている。

これらの項目の回答パターンは「英語が役に立つか」という問いのものと似ているが、すでに高1から男女差が顕著になっているところがやや異なる。

問9の結果に見られるように、高校女子に比べて高校男子においては、ALTの授業が外国への興味の触発材料になっていないようである。また、問13の結果に見られるように、高校

男子の場合、授業でのALTとの接触が動機付けとして機能している割合が中学校時よりも落ちている。これらの傾向は、問24に見られるように、高校男子においては英語がだいたい理解できるとはいえないことが、外国への興味や英語学習への動機付け等へのALTによる触発効果の低さに結びついているのかもしれない。

逆の言い方をするならば、女子の場合に、中学校での回答水準が高等学校でもほぼ同様なのは、ALTの授業での男女の授業態度の差異などが原因であると思われる。ALTが話す授業中の英語は、日本人学習者を意識したいわゆるforeigner talk（速さもゆるめで、語彙も平易なものを使うように意識的にコントロールされた英語）であるが、集中して聞く傾向の強い女子の約半数は、foreigner talkであれば理解できているようである。

G) 交互作用と学年の主効果のみが有意な項目

交互作用と学年の主効果のみが有意な項目は、問6と問8と問12であった（図3-3-6 a, b, c）。

〈ALTが授業に参加すると、いつもより英語の勉強をやる気になる〉

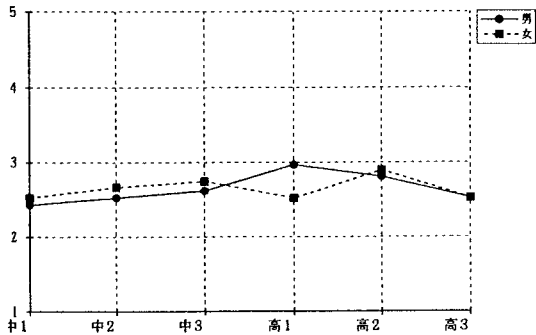


図3-3-6 a  
問6への回答の性別・学年別平均値

〈ALTの授業がもっとふえたらよいと思う〉

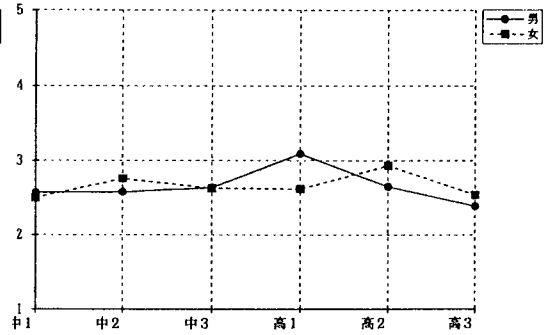


図3-3-6 b  
問8への回答の性別・学年別平均値

〈ALTの授業は、ふだんの授業より楽である〉

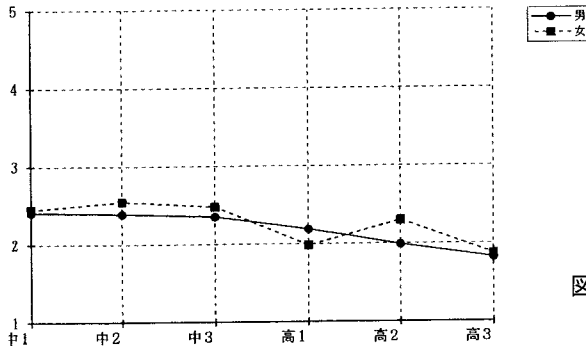


図3-3-6 c  
問12への回答の性別・学年別平均値

問6〈ALTが授業に参加すると、いつもより英語の勉強をやる気になる〉、問8〈ALTの授業がもっとふえたらよいと思う〉、問12〈ALTの授業は、ふだんの授業より楽である〉のいずれも、他の学年では平均値があまり変わらないにもかかわらず、高1では男子生徒よりも

女子生徒が「同意する」と回答し、高2ではその逆になるという傾向がある。データをたくさん集めてみる学校でとっているものであまりありえないことだが、高1を担当するALTたちは女子生徒に受け入れられやすく、高2を担当するALTたちは女子生徒に受け入れられにくいといったことがあった場合には、納得のできる結果である。この点に関しては、ALTと生徒の性別の組み合わせや、ALTの背景の文化（ALTは欧米諸国出身の白人が多いようだ）が、どのように青年期の彼らに影響しているのかを、検討し考察する必要がある。

問8について、ALTが英語の授業に参加することは、どちらかといえば「もっとふえたらよい」と受け止められているようだ。ただし、それがALTの担当する音声言語に対する興味の増加という積極的な意味合いのものなのか、通常の（伝統的な）英語授業から逃避したいという希望の現れとしての消極的な意味合いのものであるのかは、解釈の難しいところである。高1の女子生徒が男子生徒よりも「もっとふえたらよい」と思うのは、問6の結果と併せて考えるならば、積極的な意味合いを持っているものと解釈できようが、問12の結果と併せて考えるならばその逆であろう。あるいは、問6の結果と問12の結果は対立するものではないかもしれない。つまり、生徒にとっては普通の授業がたいへんにきつと感じられるために、「楽」なALTの授業で「やる気」になり「もっとふえたらよい」と思うとも考えられるが、「もっとふえたらよい」と思えるほど積極的に関与できるALTの授業だからこそ「楽」と受けとめることができるのかもしれない。

問12に関しては、男子より女子の方が、中学校レベルの普通の英語授業の内容と高校レベルのそれとの差により敏感であることによるのかもしれない。高2で否定的意見が増加している原因は、ALTが担当している音声英語の学習と関係があると思われる。特に発話に関しては、機械的なパターン・プラクティスを経た後の自発的な発話活動となると、とたんに困難さを体験するのが普通である。この困難さにあえて挑戦し、自分で文を生成しそれを発話しようと努力すればするほど、ALTの授業は見かけ以上に困難なものとなる可能性が高くなる。すなわち、普通の授業と比べ楽であるかどうかは、学習者がどのくらい真剣にALTの授業に参加しようとしているかに依存するとも言えよう。

#### H) 交互作用・性別の主効果・学年の主効果すべてが有意な項目

交互作用・性別の主効果・学年の主効果すべてが有意な項目は、問25であった（図3-3-7）。

〈ALTといっしょにスポーツなどもしてみたい〉

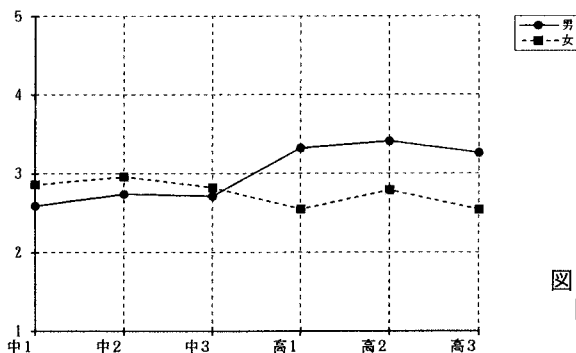


図3-3-7  
問25への回答の性別・学年別平均値

問25<ALTといっしょにスポーツなどもしてみたい>は、F)の交互作用と性別の主効果のみが有意な項目群の傾向と、D)の問10や問14において高2が「あてはまらない」方に傾いていたのをミックスさせたような結果である。

男子の場合、中学校では女子より「同意する」方に傾いている。これは、アンケート項目の「スポーツ」という表現が原因かもしれない。高校ではそれとは逆の傾向になるが、英語という教科に対する興味が減じてくるこの時期には、その教科を担当するALTに対しての接触要求や関心も減じていることを窺わせている。女子の場合に男子とは逆に、中学より高校でより「同意する」側の回答となっている。これは、英語に対する興味の他に、ALT個人やその背景の文化に対する好奇心が男子よりもあるためではないだろうか。この点については、高校卒業後の生活への見通しや、英語を何のために学ぶのかといった人生における位置づけなどとも関連させて、男女の意識の違いや、個々の生徒にとってのALTの授業の意味を考えていく必要がある。

#### 4) 英語項目とALT項目の関連

英語はとくいな科目かどうか、そして、自分の将来にとって役に立つと思うかどうかということ、ALTに関する項目との相関係数は表3-4-1のようになった。全体的にある程度の相関があることはわかるが、その中で相関係数の小数第一位がともに高い項目は、積極性を反映しているように思われる(問7, 問9, 問10, 問11, 問13, 問14, 問15, 問24)。

表3-4-1：英語項目とALT項目の相関関係

	24	13	7	11	9	14	10	15	21	20
	理解	意欲	自信	本物好き	外国興味	集中	積極的	英語表現	教科書	日本語質問
英語得意?	0.47	0.37	0.38	0.35	0.28	0.30	0.31	0.30	0.26	0.20
英語役立つ?	0.34	0.38	0.32	0.39	0.36	0.34	0.31	0.29	0.24	0.28
	6	8	25	16	19	23	12	17	22	18
	やる気	授業回数	課外活動	テスト	復習	緊張	楽	わかりやすい	テキスト 不 便 用	メモ
英語得意?	0.18	0.17	0.14	0.16	0.19	0.09	0.08	0.05	0.05	0.08
英語役立つ?	0.26	0.23	0.22	0.19	0.14	0.11	0.12	0.12	0.10	0.04

## IV. 全体的考察

### 1) ALTと英語教育

英語教育の現場に native speaker of English が参加するようになって、ほぼ10年の期間が経過した。従来の学校教育で育った年代にとっては、英語を話し聞くことができる相手が自分の周りにいてくれることは想像もできなかった。現在の中学生・高校生は、この意味ではこの上もない機会に恵まれていると言える。これまでの10年間で、とにもかくにもALTを受け入れ、それに慣れるための準備期間とすれば、今後はいかにALTを積極的に活用していけるかを考える時

期に差し掛かっている時であろう。同時に、現在は教育全体を見直す機運が高まってきている時期でもある。ALTの問題についても、こと英語教育だけに限定して考えるのではなく、小学校でのカリキュラムから高校、大学入試までを視野に収めた幅広い枠組みの中で検討していくことが必要であると思われる。特に今回の調査結果に関連して述べれば、従来型の教育（すなわち、これまでの日本的な教育観）の改善点、ALTによる授業の適切な回数、ALTの授業に集中しやすい適切なクラス・サイズ、および家庭学習も含めた従来型の授業とALTの授業との統合などが、検討の対象となろう。最後に、いかにALTが、英語とその背後にある文化とを結び付ける架け橋になれるかが、教授法を超えた教育の問題であろう。

## 2) ALTの授業と社会的比較

ALTの授業は、通常の授業と異なるがゆえに、生徒の考えや行動に様々な影響を与えていると思われる。通常の授業とALTによる授業の違いの一部を、おおまかではあるが表4-2-1に示した。

表4-2-1 通常の英語授業とALTによる授業の比較

通常の授業	ALTによる授業
書記言語が大半を占める	音声言語が大半を占める
テキスト中心	テキスト中心ではない
学習範囲や内容が比較的明確	学習範囲や内容は比較的フuzzy
達成基準が比較的明確	達成基準が比較的あいまい
実用感が低い	実用感が高い

このような対比からすると、ALTによる授業では「問題ができるかどうか」ではなく、「自分の意図が通じるかどうか」「相手の意図がわかるかどうか」が意識されやすいと考えられる。また、通常の授業では、どこまでできれば「通じる」のかが実際に体験されることが少ないので、英語の熟達度に関する生徒自身の自己評価も、相対的な評価に留まりがちなのに対し、ALTによる授業では、「自分なり」に通じたと感じられれば、自己の英語力が一定水準を超えたという自己評価が可能である。つまり、ALTの授業では、「自分なり」の主観的基準での達成感や、相対評価の持ち込みにくさによる他者との比較へのとらわれからの一時的解放があると考えられる。

本調査における学年差や性差は、このような社会的比較の方法（相対評価と絶対評価）が異なるためかもしれないが、比較する対象が異なる（比較をする際の対象となる集団成員が高校入試前後で変化することなど）ためであるかもしれない。例えば、入学試験を受ける高校について、女子が男子に比べて合格可能性の高い選択に傾くならば、それは結果的に、女子が高校入学後の社会的比較において優勢にたつ確率を高くする。これが、高校で現れる男女差や、高校1年生女子の回答パターンの特異さをもたらしている可能性があるのではないだろうか。このことを確かめるためには、志望高校決定過程での合格可能性の評定や意志決定過程、入学後の自己の成績の位置づけに関する自己評定なども同時に調べる必要がある。

あるいはまた、高校での性差は、高校卒業後に英語を何のために使うのかという目的意識の違いからきているのかもしれない。英語が将来、どのような形で「役に立つ」と思うのかを尋ねることもすべきかもしれない。

## 謝 辞

本研究を行うにあたり、調査にご協力くださった中学校、高等学校の先生方、生徒の皆さんに、心より感謝申し上げます。

## 引用文献

Kazumi Adachi, J. Douglas Macarthur & Ronald Sheen 1996 *Perceptions of the JET Programme 1993-1995*  
Grant-in-Aid for Scientific Research (C) Research Project Report